HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』不審本文考（七）
Author(s)	後藤，康文
Citation	北海道大学文学研究院紀要，162，19(右)-40(右)
Issue Date	2021-02-26
DOI	https://doi.org/10.14943/bfhhs.162.r19
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/80584
Type	departmental bulletin paper
File Information	1005_bfhhs.162.r19.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

10.14943/bfhhs.162.r19

三巻本『枕草子』不審本文考（七）

後藤康文

二十六

【本文】「成信の中将は、入道兵部卿宮の御子にて」の段・2

こまのの物語は、何ばかりをかしき事もなく、ことばも古めき、①見所おほからぬも、月に昔を思ひ出でて、虫ばみたる蝙蝠取り出でて、「②もと見しこまに」と言ひてたづねたるが、あはれなるなり。

（第二百七十四段・四二七頁六行～一〇行）

【三巻本諸注の解釈】

〔①について〕

×見どころ多からぬも／とりえもすくないが　（『評釈』本文／通釈）

×見どころ多からぬも／見がいのある箇所は多くないのだが。　（『大系』本文／頭注）

×見どころおほからぬも／これという点も多くはないのだが　（『全講』本文／文意）

×見どころおほからぬも／読みたいと思う意欲もない物語だが　（『旺文社文庫』本文／現代語訳）

・見所多からぬも／見所のほとんどない作品だけれども／能因本「おほからねど」、前田本「もなけれど」。　（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×見どころおほからぬも／見せ場はすくないが　（『解環』本文／口訳）

×見所多からぬも　（『和泉古典叢書』本文）

×見どころおほからぬも　（『新大系』本文）

×見所は多くないけれど　（『新全集』現代語訳）

×見所多からぬも／賞美することが余りないけれども　（『全訳注』本文／現代語訳）

×見所おほからぬも　（『新編』本文）

〔②について〕

×もとみし駒に。／もと見しこまに……／「夕闇は道も見えねどふるさとはもと来（コ）し駒にまかせてぞゆく（ママ）」

（後撰集戀五・古今六帖その他に見える）をいうのであろう。「見し」は能本に「こし」とある。

（『評釈』本文／通釋／頭註）

×もとみしこまに／後撰集、十三恋五・古今六帖、一・大和物語、上「夕やみは道も見えねど故里はもとこし駒にまかせてぞくる」をさすか。

（『大系』本文／頭注）

×もと見しこまに／もと見しこまに……／後撰集十三恋五、古今六帖一、大和物語上「夕やみは道も見えねどふるさとはもとこし駒にまかせてぞくる」を指すか。

（『全講』本文／文意／釈義）

×もと見しこまに／もと見しこまに／『後撰集』恋五・よみ人知らず、『古今六帖』一「夕闇は道も見えねどふるさとはもとこし駒にまかせてぞくる」（『大和物語』は初句、「夕されば」）の類をいうのであろうか。

（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

△もとみしこまに／もとみしこまに／後撰集巻十三「思ひ忘れにける人のもとにまかりて、よみ人知らず／夕闇は道も見えねどふるさとはもとこし駒にまかせてぞ来る」。古今六帖一にも。大和物語には、初句「夕されば」とあって、兼盛の歌とする。おそらくこの歌であろう。「もとみし」の形は作者の不用意かあるいは誤写であろう。能因本「もとこし」。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×もとみしこまに／もと見し駒に／「もと見し駒に」というこの引き歌の句と全く同文の古歌は見当たらない。闇夜でさえも訪ねて行きたい心境だということを『狛野物語』の主人公は、この古歌を吟詠することで表現したのであろうが、『後撰集』恋五・『古今六帖』巻一・『大和物語』第五十六段にある、（歌略）が、内容的には最も妥当している。「こ（字母己）」から「み（字母三・見）」へ、字形相似によって本文が転化したものとすれば、これ

が相当するが、『枕草子』においては、三巻本・前田本共に「もとみし」とあり、能因本のみが「もとこし（慶安刊本以下の流布本は「もと見し」）」、とあるのみであるし、『狛野物語』の原文がどのようであったかは知り難いので、恣に改訂することは許されない。（『解環』本文／口訳／語釈）

×もと見し狛に／『狛野の物語』の主人公のよんだ歌。能本に「もとこしこまに」とある。これだと、「思ひ忘れにける人のもとにまかりて、夕闇は道も見えねど古里はもと来し駒にまかせてぞ来る」（後撰集・恋五。古今六帖一、大和物語にも）を主人公が口ずさんだことになる。（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×もとみしこまに／古今六帖一、後撰集・秋上（ママ）「夕やみは道も見えねど古里はもと来し駒にまかせてぞ来る」。こまの物語の主人公が、昔の女を訪ねてこの歌を引いたのであろう。（『新大系』本文／脚注）

×もと見しこまに／「思ひ忘れにける人のもとにまかりて　夕闇は道も見えねど古里はもとこし駒にまかせてぞくる」（後撰・恋五　読人しらず）の歌を「こま野の物語」の登場人物が口ずさんで女を訪れたものか。『古今六帖』第一にも、『大和物語』五十六「もと来し駒」には初句「夕されば」として見える。能本は「もとこしこまに」とあって解しやすい。底本によるとそれとは別の歌を登場人物が詠んだと見ることもできる。（『新全集』現代語訳／頭注）

×もと見しこまに／もと見し駒に／『後撰集』恋五の読人知らずの歌「思ひ忘れにける人のもとにまかりて　夕闇は道も見えねど古里はもと来し駒にまかせてぞ来る」によるのだろうが、歌の第四句を誤って引いている。誤引は原作者によるのか清少納言によるか不明。（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

・もとみしこまに／「思ひ忘れにける人のもとに罷りて　夕闇は道も見えねど古里はもと来し駒にまかせてぞ来る」

（後撰・恋五・不知／六帖・一・夕闇／大和・五十六段・兼盛・「夕されば」）に拠る。「老馬の智」を踏まえた歌。

「み（三）し」は、「こ（己）し」の誤写か（萩谷）。

（『新編』本文／脚注）

【批評】

〔①について〕

打消しの助動詞「ず」の連用形「ぬ」＋係助詞「も」＝「ぬも」は、「～ないのも」の意で、下にこれを受ける述部「～である」等を伴う。『源氏物語』から用例を拾うと以下のとおり。

・はかなき木草につけたる御返りなどのをり過ぐさぬも、軽々しくやとりなさるらむなど

（朝顔巻／新編日本古典文学全集②・四七八頁一行～二行）

・あはれを知りたまはぬも、さまことなるわざかな。

（藤裏葉巻／同③・四四一頁四行～五行）

・近くさぶらふ人々あやしとや聞かむと、うちも身じろきたまはぬも、なほいと苦しげなり。

（若菜上巻／同④・六八頁七行～九行）

・いかめしく聞きし御賀のことを、女二の宮の御方ざまには言ひなさぬも、労ありと思す。

（若菜下巻／同・二七六頁一五行～二七七頁二行）

・人聞かぬ奥山、遥けき野の松原に声惜しまぬも、いと隔て心ある虫になんありける。

（鈴虫巻／同・三八一頁一五行～三八二頁二行）

・月日の過ぎゆくままに、昔のことのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ

（夢浮橋巻／同⑥・三八三頁一〇行～一一行）

ゆえに、諸注傍線部の示すごとくこれを逆接接続の意に解することはできない。お粗末の一言に尽きよう。ここは当然誤写を疑うべき箇所なのである。

〔②について〕

ここが、よく知られた「夕闇は」歌の第四句を引いたものであることは明らか。清少納言の記憶違いである可能性は意味上の径庭からしてゼロに近いので、当時「もと見しこまに」の〝異伝〟があったとでも考えないかぎり、現本文を擁護する余地は毫もない。にもかかわらず、諸注頑として本文改訂に踏み切らないのはどうしてであろうか。皆気づいているにもかかわらず、損傷の多い江戸期の底本本文をなぜそこまで後生大事にするのであろうか。

百害あって一利なし、といえばいい過ぎかもしれないが、そうした硬直姿勢が巷に誤解を流布させる根本原因となるのだから、本当に困る。

【本文改訂案】

〔①について〕

現本文のままで、ここを逆接接続とみることは不可能だが、文脈上はそうでなければ意が通じない。要するに、「ぬも（奴毛）」は「ねと（禰止）」の誤りであり、傍線部本文①の祖形は、

◎見所おほから**ねど**

〔名場面は多くないけれども〕
であったと考えられるのである。この推測批判による所産は、『角川文庫』が留意する能因本本文と奇しくも一致する。

〔②について〕
既述のとおり、ここは、
◎もと**来**しこまに
〔昔来（て道を熟知し）た馬に〕
が紛れもない〝正解〟。「恣に改訂することは許されない」（『解環』）などという的外れなお説教に耳を傾ける必要はない。「み（三）」は「こ（己）」のありふれた誤写なのであり、今後は、能因本と結果的に等しいこの形の本文が採用されねばならないのである。

【参考】
〔三巻本本文〕①異同ナシ②異同ナシ
〔能因本本文〕①見所おほからねと（学富）②もとこしこまに（学富）

二十七

【本文】「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」の段

はじめありける事ども、中将の語りたまひつる同じ事を言ひて、「『ただ、この返事にしたがひて、①こかけをしふみし、すべてさる者ありきとだに思はじ』と、頭中将のたまへば、ある限り②かうようしてやりたまひしに、ただに来たりしは、なかなかよかりき。

（第七十八段・一三八頁一一行～一五行）

【三巻本諸注の解釈】

〔①について〕

・こかけをしふみし／（こかけをしふみし）／意義不明。流布本にはこの句がない。（『評釈』本文／通釋／頭註）

・こかけをしふみし／八字意未詳。誤脱あるか。能因本にはない。（『大系』本文／頭注）

・こかけをしふみし／ナシ／この八字、本文に錯乱があるらしく、意味不明。能因本には見えない。（『全講』本文／文意／釈義）

・こかけをしふみし／こかけをしふみし／この八字意義未詳。「かけ」は影。「ふみ」は踏みか。過去においてよくもそんな女の影を踏んだものだの意か。三巻本系統以外の諸本にはこの本文がない。

（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

・こかけをしふみし／ナシ／八字、意味不明。能因本にないのは削ったのであろう。萩谷朴氏は「籠懸（こか）け、押文（おしふみ）し」と読み、靱（ゆき）を懸け、貼り紙をする勅勘の作法とする。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×こかけ、おしふみし／靱をかけるとか、貼り紙をするとか

（『解環』本文／口訳）

×（…したがひ）手にかけ、押文しするゑて（、さる者）／思いのままにこらしめ、この事を貼紙にしてかかげて、の意か。底本等三巻本「てこかけをしふみしすへて」、能本は、この部分がなく、「さる者」につづく。『解環』は「籠懸け、捺し文し」とよみ、「靱をかけるとか、貼り紙をするとか」という勅勘の作法という。文意未詳。

（『和泉古典叢書』本文／頭注）

・こかけをしふみし／諸説あるが未詳。

（『新大系』本文／脚注）

・こかけをしふみし／「こかけをしふみし」は未詳。一説、「籠懸け、捺し文し（封じ）」とよむ。

（『新全集』現代語訳／頭注）

・こかけをしふみし／（こかけをしふみし――意味不明）／未詳。萩谷説は、「『籠懸け』（あるいは）『捺し文し』の意にとっておくことにする。要するに斉信は、清少納言の返答次第によっては、勅勘の処分を申請して、清少納言を社会的に葬ってしまおうというほどの意気込みで、（勿論冗談ではあろうが）『蘭省』の一句を呈したのであった。云々」という（『枕草子解釈の諸問題』）。

（『全訳注』本文／現代語訳／語釈）

・こかけをしふみし／未詳。一説「籠懸け押文し」で勅勘の作法（萩谷）。

（『新編』本文／脚注）

〔②について〕

・かうようして／相談して／未詳。「勘用」の字をあてるものか。流布本にはこの句がない。
（『評釈』本文／通釋／頭註）

・かうようして／居合せた人皆で考えて。「かうよう」の意未詳。あるいは勘要・勘用などの義か。
（『大系』本文／頭注）

・かうようして／頭をひねつて／未詳。あるいは勘要、勘用などの義か。
（『全講』本文／文意／釈義）

・かうようして／頭をひねって文句を考え／意義未詳。「勘用」あるいは「勘要」の義か。おそらく頭をひねり考えての意。
（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

・かうようして／知恵をしぼって／意味不明。前後から、考えてというほどの意であろう。「ある限り……たまひしに」能因本なし。
（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

・かうようして／大賛成で
（『解環』本文／口訳）

・かうようして／「勘用」「勘要」「饗応」等の字音語とする説があるが、未詳。智恵をしぼって、ということか。能本はこの部分なし。
（『和泉古典叢書』本文／頭注）

・かうようして／諸説あるが未詳。
（『新大系』本文／脚注）

・いろいろ考えて／「かうよう」未詳。「勘用（かうよう）」または「勘要（かんよう）」の義か。仮に皆で知恵をしぼって、のように解する。
（『新全集』現代語訳／頭注）

・かうよう〔に〕して／相談して
（『全訳注』本文／現代語訳）

・かうようして　（『新編』本文）

【批評】

〔①について〕

諸注「意義不明」（『評釈』）「意未詳」（『大系』）「意義未詳」（『旺文社文庫』）「意味不明」（『全講』『角川文庫』）「未詳」（『評釈』『新大系』『新全集』『全訳注』『新編』）とする、解読が頗る困難な部分で、現代語訳を放棄したり（『旺文社文庫』『新全集』『全訳注』）、割愛したり（『全講』『角川文庫』）しているのが実情。そのような苦境のもと、勇猛果敢さが身上の『解環』は、例のごとく自らの旧稿を引用して、

「蘭省花時錦帳下」という出題を清少納言のもとへ遣わすに際して、頭中将斉信が声明した最後的というものが、三つの文節に切れていることは、疑いを容れる余地はない。そして、その第一節が「この返辞の如何によっては」という前提条件を意味し、その第三節が「一切そんなものが存在したとも思うまい」という結果内容を意味するものであるならば、「こかけおしふみ」という第二節が、その前提条件によって引き起こされ、その結果内容を招来する対応手段を意味するものであるに違いないことは、論理的に容易に導き出すことの出来る推定である。そうした観点に立てば、八文字の最終音節「し」が、サ行変格の動詞「す」の連用形に相当することが、一層この推定を力づけてくれるのである。

では、「こかけおしふみし」というのは、何をどうすることなのであるか。子供を見れば親が判り、屍体を解剖すれば死因が判るように、「すべてさるものありきとだにおもはじ」という結果内容を導き出す手段には如何なるも

のがあると、反転して溯及することが必要である。結果から反転して原因を探求するという溯及法は、本文解釈の技術として大いに重んじられねばならない。

そこで我々はまず、人間の存在を否定するような結果を招来する手段には如何なるものがあるかを考えてみなければならない。

それには第一に、直接行動としての殺害・監禁等がある。しかし冗談にもせよ、このような直接行動は、「この返り言に従ひて」という前提条件の平和な背景によって否定せられねばならない。

第二に、これもこの条件に対しては些か過酷であるが、間接行動としての各種の刑法の適用が考えられる。これにも死刑はあるが、第一の場合と同じ理由で否定せられる。しかし刑法には、遠流・禁錮・閉門等、肉体的生命を奪わぬ程度に、本人の社会的生命を制する手段はいくらでもある。これならば冗談として許されることは勿論、実際手段としても、政界の暗闘場裡には常に可能なことであったと考えられる。官僚殊に蔵人頭としての斉信が、二言目には「勅勘」を振りまわすなどということは、冗談としては当然認められることである。そこでまず「こかけおしふみし」という八音節の語の刑法上の適存性を検討すべく、この方面に志向する歴史的規準に解釈のバトンが渡されることとなる。

そこで、当時の各種刑法を知るための最も安易な手段として、古事類苑法律部第六上編責罪過の章をひもとくと、次のような解説が眼にとまる。

罪過ヲ責ムルニ、勅勘、朝参ヲ停メ、門籍ヲ封ジ、閉門、籠居、怠状等アリ。勅勘ヲ蒙リタル人ハ、門ヲ掩ヒテ屏居シ、検非違使、靱ヲ其門上ニ懸ケ、幷ニ人ノ其ノ家ニ来往スルコトヲ禁ズ。後ニハ靱ヲ懸ケズシテ、但

門ヲ封ズルコト、為レリ。

しかして古事類苑は、勅勘の実例及び論証として、長秋記長承二年七月廿六日の項、本朝世紀仁平元年八月廿六日の項、徒然草勅勘の所に靱かくる作法の章等を掲示している。今、徒然草の文章を挙げると、次の如くである。

勅勘の所に靱かくる作法、今はたえて知れる人なし。……（中略）……看督長の負ひたる靱を、其家にかけられぬれば、人出で入らず。此事絶えて後、今の世には封をつくることになりにけり。

靱は矢を入れて背負う武具であって、製法は種々あるが、長い竹籠を毛皮で覆うのが普通の製法であった。故にこれを「こ（籠）」と呼ぶことは当然である。従ってこの疑文の中「こかけ」三音節が、とりも直さず「籠懸け」であって、「靱懸くる」勅勘の作法を指すものであることが知られる。しかして残る五音節も「おしふむじ」の転訛として「押し封んず」即ち勅勘の今一つの作法を指すものと見ることが出来るのである。あるいは、「おしふみし」のまま、「を」一字の仮名遣いの誤りを認めて「捺し文し」即ち貼り紙をすることと見ることも出来る。更に一説として、「籠懸け」を名詞として、「籠懸けをし、封んじ」と訓むことも許されよう。この場合は、靱を懸けることと、門を封じることと、新旧二つの勅勘の作法と並列せしめたのではなく、「籠懸け」をすることによって「封じ」ると直列の意に解することも出来る。その場合は、宮内庁本と陽明文庫三冊本に「こかけをし」の「し」の旁に「て歟本ノママ」と注があるのによって、「こかけをして、ふみし」という異文の存在を重視することも出来る。但し、今は一往、三巻本プロパーの本文に従い、話し言葉として、「こかけ、おしふみし」と句切る呼吸の順調に従って、「籠懸け」（或いは）「捺し文し」の意にとっておくこととする。要するに斉信は、清少納言を社会的に葬ってしまおうという程の意気組みで（勿論冗談ではあろうが）「蘭省」の一句を呈したのであった。つまり、

可愛さ余って憎さ百倍といったところである。　（問題点）

と、何とも奇矯な思考回路と見解を披歴しているわけだが（波線部は誤認ないし論理破綻の顕著な箇所）、これに触発されたとおぼしい『和泉古典叢書』の試解もろとも、所詮突拍子もないこじつけに過ぎず、従いがたいのは明白だろう。

もっとも、『解環』が重視したとおり、ここは文脈上、すぐあとにつづく斉信のことば「すべてさる者ありきとだに思はじ」に連鎖する内容となるはずであり、その点にこそ解決の糸口があるのは確かである。ただし、『解環』の謳った「結果から反転して原因を探求するという溯及法」とやらを適用するのは誤りであって、両者を並列関係にあると捉えることによってはじめて、善処が可能になるのではないかと思われる。

〔②について〕

「かうよう」に漢語「勘要」「勘用」などが当てはまる可能性は示唆されているものの、確証はない模様で、諸注それ以上の考究を放棄する中、『解環』は次のごとく「饗応」説を主張しているのだが認めがたい。

「かうよう」という四音節の語が、漢字を宛てれば如何なる意味を持つ語句となるか。これは実に多面多岐で、探索困難な問題である。ウ音便を認め、拗音の消滅を認めれば、宛てはまる漢語は更に数限りもない。そこで対照法解釈の諸規準を適用して、「みな頭をひねって」と解釈する通説の不当なることは、既に述べた。ここで、「かうよう」という表記法が許容する範囲の漢語すべてを列挙する愚はさし控えるが、いよいよ、斉信が、最後的な決意を表明して、一同凝議の上に成った難題を使者に持たせてやろうという今はの時に、一座の人々は斉信の決

然たる態度にどのような反応を示すかという心理的規準に立って、当時の用語として認められる範囲のものを探索する時、筆者は「饗応」もしくは「嚮応」という語句を得た（中略）。

さて、「あるがぎりかうようして」の「かうよう」四音節に「饗応」もしくは「嚮応」の字を宛てることは、意味の上からは最も適切であり、かつその用例は一々枚挙の遑もない。もしこれを記録体の漢文で表記するならば「満座饗応（又は嚮応）」とあるべきところであろう。つまり、一座の人々が、斉信の決然たる態度に翕然として饗応（嚮応）し、恰も一大壮挙の如くにして、その使者を送り出したのである。まことに泰平の閑事ではあった。

（問題点）

清少納言が作中特殊な漢語を用いることがあるのは事実だけれど、それにこだわらない解決法も別途ありうるのではなかろうか。

【本文改訂案】

〔①について〕

美しい五月の、とある夕暮れ。長い午睡から覚醒する間際に、忽然として〝復元〟案が浮かんできた。忘れぬうちに、それを順序立てて書き留める。

i 謎の八文字のうち最後の「し」は、直後の「思はじ」と同じく打消しの意志を表す助動詞「じ」であり、第一にここを固定する。

→こかけをしふみじ

ii次に、「をしふみ」の部分は「ふみをし」の転倒とみ、さらに、「し（志）」は「は（者）」の誤写と推断して改訂を施す。するとここは、「ふみをは」＝「文をば」と読めることになる。「し」をそのまま強意の副助詞と認定して「文をし」の形も許容可能かもしれないが、やはり「をば」とあるべきだろう。

→こかけ文をばじ

iii残る三文字「こかけ」については、まず「か」と「け」を逆順にして「こけか」。そして、「け（遣）」は「れ（連）」の写し間違いで、「これか」を本来の姿と推定する。

→これが文をばじ

iv最後に、「ば」と「じ」の間に「み」一字の脱落を想定してこれを補う。現本文の〝前身〟が「こかけをしふみし」ないし「こかけをしふみみし」であった可能性は十分考えられよう。

→これが文をば見じ

以上をあらためてまとめるならば、傍線部①本文の祖形は、

◎**これ**が文を**ば見**じ

〔（今後一切）この者の手紙は見まい〕

となる。頭中将藤原斉信は、「これで決着をつける。今回の返信内容如何によって、今後清少納言からの便りは一切見ないことに、否、そのような人間がいたとさえ思わないことにする」と、そう宣告したのである。

この〝天啓〟の当否に関しては、無論「世人ことわれ」としかいえないわけだが、複雑怪奇な『解環』説よりはよほど健全で目覚めもよいのではないかと自負する。ちなみに、読解不能本文につき、「能因本にないのは削ったのであ

ろう」（『角川文庫』）とする見方には賛同してよいだろう。

〔②について〕

「美しい五月」だろうが何だろうが、そう立てつづけに天の啓示があろうはずもない。よって、ここに格別な妙案はない。とはいえ、たとえ無様であってもささやかな抵抗だけはしておかねばなるまい。闘志を失ってしまったら学問も学者生命も終わりだからだ。

そこで、どう〝抵抗〟するかだが、従来のように「かうよう」を一語とみるのではなく、転写の過程で、「かう」の前にあった「と」の字、「よう」の後にあった「い」の字がそれぞれ脱落したと仮定して、それらを補ってみるのである。すると、傍線部②本文は、

◎**と**かう用**意**して

〔あれこれと神経を使って〕

と〝復元〟されることになる。今、三巻本『枕草子』中のサ変動詞「用意す」の用例を列挙するなら、

・頭一所にゆるぎあひ、さし櫛も落ち、用意せねば、折れなどして笑ふもまたをかし。

（「正月一日は」の段／新編日本古典文学全集・二七頁七行～八行）

・打たれじと用意して、常にうしろを心づかひしたるもいとをかしきに（同／同・二八頁六行～七行）

・「いかが言ひやるべき」と、近うゐたまふ限りのたまひ合はせて、やりたまふことばは聞えず。いみじう用意して、車のもとへ歩み寄るを、かつ笑ひたまふ。（「小白川といふ所は」の段／同・七九頁一〇行～一三行）

・同じ所に住む人の、かたみに恥ぢかはし、いささかの隙なく用意したりと思ふが、つひに見えぬこそ、かたけれ。
（「ありがたきもの」の段／同・一二七頁四行～六行）

・いみじくかしこまり、つちにゐし家の子、君達をも、心ばかりこそ用意しかしこまりたれ、同じやうに連れだちてありく。
（「めでたきもの」の段／同・一六六頁一四行～一六七頁一行）

・二月十日余日、宮の御方にわたりたまふべき御消息あれば、常よりも御しつらひ心ことにみがきつきろひ、女房など、みな用意したり。
（「淑景舎、春宮にまゐりたまふほどの事など」の段／同・一九九頁一〇行～一三行）

の全六例がある。いずれも、「用心する」「気を張る」「神経を使う」などの意。

さて、右改訂本文で文意が何とか通じたとしても、「と」と「い」の二文字が脱落した可能性は低いだろう。ともあれ、当面はこれをもって暫定案とする。なお、能因本は傍線部本文が意味不通のため①の場合と同じくこれを削除したものと思われる。

【参考】

〔三巻本本文〕①異同ナシ②異同ナシ

〔能因本本文〕①ナシ（学富）②ナシ（学富）

二十八

【本文】「十二月二十四日、宮の御仏名の」の段

日ごろ降りつる雪の、今日はやみて、風などいたう吹きつれば、垂氷（たるひ）いみじうしだり、地（つち）などこそ、むらむら白き所がちなれ、屋の上はただおしなべて白きに、あやしき賤の屋も雪にみな面隠しして、有明の月の隈なさに、いみじうをかし。

（第二百八十三段・四三六頁一三行～四三七頁二行）

【三巻本諸注の解釈】

×むら〳〵白きところがちなれ／地面などにこそ、ところどころ白い程度ぐらいであるが／地面こそすつかりおおいかくさないで、むらむらと白いところがちの黒白色であるが。（『評釈』本文／通釈／頭註）

×地などこそむらむら白き所がちなれ／地面などはまだらに白い所が多いのだが、屋根の上はどこも一帯に白いので、粗末な田舎家も皆顔を隠した状態で。（『大系』本文／頭注）

×地などこそ、むらむら白きところがちなれ／地面など、ところどころ白いところも多いが（『全講』本文／文意）

×地などこそむらむら白きところがちなれ／（黒い）地面もむらむら白いところが多いといった状態であるが／白いところが多いといった状態であるが。「こそ……已然形」で、下に逆接的に続く。

（『旺文社文庫』本文／現代語訳／脚注）

×土などこそ、むらむら白き所がちなれ／地面などは、まだらに白い所が多いといった程度だが／能本「くろきがち」。

（『角川文庫』本文／現代語訳／脚注）

×つちなどこそ、むら〳〵しろき所がちなれ／地面なんかなら、（雪がとけて）白い所があちこち残っている程度だが

（『解環』本文／口訳）

×土などこそ、むらむら白き所がちなれ／能本「くろき」。

（『和泉古典叢書』本文／頭注）

×地などこそむら〳〵白き所がちなれ

（『新大系』本文）

×土などは、まだらに白い所が多いけれど／能本「黒きがちなれ」。

（『新全集』現代語訳／頭注）

×土などこそむら〳〵白き所がちなれ／地面などは、まだらに白い所が多いといった程度だが

（『全訳注』本文／現代語訳）

×地などこそ　むらむら白き所がちなれ

（『新編』本文）

【批評】

清少納言が愛した、雪と月とが映発しあう美しい情景の描写であるが、傍線部本文以下は、はたして「地面などはまだらに白い所が多いのだが、屋根の上はどこも一帯に白い」（『大系』）などという論理の記述になっているのだろうか。諸注さして気に留めていない様子だが、もしほんとうに、〔地面は白い所が多い〕ケレドモ〔屋根の上はみな白い〕と書かれていたとするなら、それは意味の混濁した拙劣きわまりない文章だと、切って捨てざるをえない。

また、現代語訳の波線部に見える「程度」（『評釈』『角川文庫』『解環』『全訳注』）という訳語は、原文にはまったくない要素の恣意的な付加であって、たとえ無意識にせよ、こうしたねじ曲げを図らなければ解釈が成り立たなかった事情が透けて見えるのである。

【本文改訂案】

問答無用とはまさにこのこと、三巻本「しろき」の「し（之）」は、疑いなく「く（久）」の誤写であり、傍線部本文は、

◎地（つち）などこそ、むらむら**黒き**所がちなれ

〔地面なんかは、（雪がなくなり）まだらに黒い所が多いけれど〕

と正されなければならない。何日もの間降り積もっていた雪が強風で吹き飛ばされたり解けたりして地面が露になった「黒」と、依然あまねく屋根を覆う雪の「白」。その鮮やかな色彩の対比こそがここでの眼目だったのである。三巻本系統の書写者某が肝心なその点を弁えず、まわりの「白」と字形の酷似とに幻惑されて、うっかり「くろ」をも「しろ」と写してしまった、というのが事の真相と考えられる。

さて、これで本節の投げかけた疑問にもめでたく〝黒白〟がついたわけだが、この推測批判の結果は能因本「くろき」と奇しくも一致する。しかし、これまでにも再三述べてきたように、だから能因本本文を是として採るということでは毛頭ない。念のため明記しておく。

【参考】

〔三巻本本文〕異同ナシ

〔能因本本文〕つちなとこそむら〳〵くろきかちなれ（学富）